

アートプロジェクトにおける NPO 法人の役割に関する考察

—NPO 法人向島学会を事例として—

Writer

高橋 りほ TAKAHASHI Riho

博士前期課程芸術専攻
芸術支援領域 2 年

今日、全国各地で「アートプロジェクト」と呼ばれる活動が展開されている。アートプロジェクトは、事例ごとに多種多様な活動を展開しており、アーティストや行政、学校、地域住民など、その運営には多様な団体・個人が関わっている。本研究では、特定非営利活動法人（以下、NPO 法人）に着目し、アートプロジェクトにおける NPO 法人の役割を明らかにすることを目的とした。研究対象として、〈墨東まち見世〉というアートプロジェクトの主催団体である NPO 法人向島学会（以下、向島学会）を選び、資料調査やアートプロジェクトの運営におけるキーパーソンへのインタビューを行った。

アートプロジェクトの主催団体の種類に着目すると、非営利組織が全体の約 7 割を占めている。非営利組織の中でも法人格をもつ NPO 法人は、団体名義で各種事務手続きを簡易にすませることができるなど、「安定的な活動基盤となる」という利点がある。アートプロジェクトに関わる NPO 法人を、その活動目的から「アート NPO」と「他分野 NPO」に分けると、アート NPO は他分野 NPO に比べて「主催」として表記される割合が高い。以上のことより、アート NPO は芸術文化活動に関する専門性の高さから、他分野 NPO よりも高い割合でアートプロジェクトの主催を担っており、他分野 NPO はアートに関する専門性は低い、幅広い分野において活動を展開していると考えられる。

向島学会は、調査研究に関する事業を中心としたいくつかの事業を展開している「他分野 NPO」である。〈墨東まち見世〉開始以前の向島学会は、ア

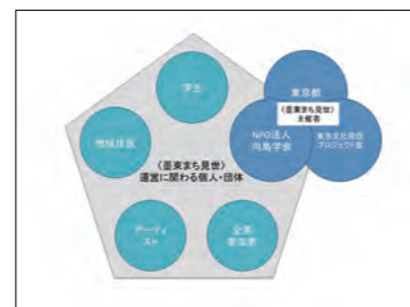
トプロジェクトの主催となるのではなく、アートプロジェクトの後援や協力を行うなど、「活動支援」を行っていた。これはすなわち、一部の向島学会の会員が中枢を担い、地域住民などの有志とともにアートプロジェクトの運営が行われていたということであった。「主催ではなく活動支援を行う」という向島学会のアートプロジェクトへの関わり方は、結果としてアートプロジェクトの運営を契機とした新たなコミュニティを生むこととなり、NPO 法人という枠を越えたネットワークが形成されたと言えよう。

2009 年から 2012 年に行われた〈墨東まち見世〉において向島学会は主催団体となった。しかしながら、向島学会全体で運営を担った訳ではなく、向島学会の一部の会員を中心とした多くの有志によって運営されていた。では、〈墨東まち見世〉の運営を中心的に担った向島学会会員である A 氏、B 氏の経歴や活動で得られた知見・意識は、〈墨東まち見世〉の運営にどのように生かされているのだろうか。

両氏は芸術文化に関する多数の活動経験を積み、過去の経験をもとに「自主的な参加姿勢を引き出すよう配慮」するなどして〈墨東まち見世〉に反映させる、「皆で話し合っただけのボトムアップという決定方式の尊重」及び「墨東まち見世のミッションの実現」の 2 点を重視する、場面に応じて「事務局」と「向島学会」という 2 種の立ち位置を行き来しながら発言・行動するなどの点が共通していた。したがって、向島学会のキーパーソンは、アートプロジェクトの運営において、芸術に関

する専門性のある会員として、NPO 法人と「アートプロジェクトの運営を担うコミュニティ」とをつなぎ、非営利組織としての自立的な活動を守る役割を果たしていると考えられる。

結論として、他分野 NPO は多様な分野の活動を展開しながら、アートプロジェクトの運営を契機とした新たなコミュニティを地域に生み、NPO 法人外部との交流をもたらしと言えよう。しかしながら、アートプロジェクトの運営を担う上で芸術に関する専門性をもつ会員が必要であり、彼らが NPO 法人とアートプロジェクトとをつなげていくことが求められる。



〈墨東まち見世〉関係図

日仏芸術社による 芸術支援活動

Writer

中川 三千代 NAKAGAWA Michiyo

博士前期課程芸術専攻
芸術支援領域 2 年

日仏芸術社は、フランス人美術商エルマン・デルスニス（Herman d'Oelsnitz, 1882-1941）と黒田鵬心（本名は朋信 1885-1968）によって 1924 年（大正 13 年）11 月に設立された法人である。1922 年（大正 11 年）から東京、大阪を中心にほぼ毎年、9 回開催された大規模な売立て展「仏蘭西現代美術展覧会」の第 4 年目以降の円滑な運営を主な目的として設立された。実際の活動はそれに止まらず、ジャンルを絞った展覧会の開催、地方巡回による展覧会の挙行、月刊誌「日仏芸術」の発行、展覧会関係の出版物の発行、日仏芸術社画廊での常設陳列や貸画廊など多彩なものにわたった。本稿では、日仏芸術社の活動についての研究のうち、地方での展覧会について概観する。

1925 年（大正 14 年）2 月に東京で開催された、絵画にジャンルを絞った「仏蘭西現代絵画展覧会」を地方に巡回したのがその始まりであった。東京、大阪の次に、福岡、金沢、横浜と巡り、入場者数は、福岡では 16 日間で約 7000 人、金沢では 11 日間で約 7000 人、横浜では 10 日間で約 1400 人だった。東京での 27 日間の入場者数 21,000 人に比べて、また、東京での第 1 回仏展の 52,000 人と比べても、地方の人口を考えれば驚異的な人数である。その後は毎年、日本各地での地方展が開催された。開催地は、札幌、仙台、新潟、富山、高岡、金沢、名古屋、京都、福岡、別府など全国広範な都市に及んでいる。

地方展は多くの場合、商工会の会場施設や地方新聞社等、地元との協力体制のもとで開催され、開催会場は、展覧会専門の設備ではない商品陳列所が主であ

た。そのような場所は、物品を陳列するための設備であり、十分なスペースは確保されていても、展示に工夫が必要であったと思われる。実際、東京での第 1 回仏展は、主な展覧会場が予約でふさがっていたために、農商務省の商品陳列所で開催したという経緯があり、展示替えなど、作品展示のために大変な苦勞をした記録が残っている。

また、展示スペースの都合上、東京・大阪での出品点数から大きく数を減らして展示することが多かったが、新たにフランスから到着した作品が時期的に都合の良い場合、地方展に最初に出品する場合もあった。時には、東京ですでに売約となった作品を、買い手の承諾を得て展示させることもあった。

地方展独自の試みとしては、フランスの現代絵画より一時代古く、すでに美術館に収蔵されているため持ち込めない作品を写真で展示したことがあげられる。美術商デルスニスとしては、あくまで美術品を売るのが原則だったが、美術教育としての展覧会の役割も考えていた。共同経営者の黒田鵬心も「地方の展覧会は経済上からいえば全く犠牲的であるが、地方の美的趣味向上、洋画教育の発達には少なからぬ効があり、また実際心から喜んでくれた」と述べている。

日仏芸術社という組織が出来て、作品のストックがあるおかげで、作品の貸出も可能となった。地方からの要請で、作品を送ったこともあり、例えば、1926 年 3 月に、文房具店開業の催しとしての仏画小展のために盛岡へ小品十数点を送ったことや、同年 11 月に、水戸市での第 3 回白牙会展覧会に油絵・

水彩・版画などを貸し、好評を得たこと、さらに 1927 年 4 月に、金沢市旧市会議事堂で開かれた「文化学院絵画展」に特別陳列として 15 点出品したことなどが記録として残っている。

地方での日仏芸術社の活動は、現代という芸術支援活動、具体的には鑑賞支援や教育普及であり、そのような概念がまだ全く構想されていなかった大正末期、昭和初期の日本において、はからずも芸術支援活動の先駆者としての役割を果たしたといえるだろう。

また、最近の話題としては、2013 年 10 月に茨城県つくば美術館で開催された「ようこそ、白牙展へ」で、当時の白牙会展覧会の様子が復元展示されるという出来事があった。当時の宣伝ポスターは、日仏芸術社の特別陳列が知らされている貴重な資料であり、当時の地方での展覧会の在り方を掘り起こすきっかけになるであろう。



大正時代の「白牙会展」展示風景を復元した様子（茨城県つくば美術館写真提供）